

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 1 LESSON 7 授業例①

Y.A. 先生

指導計画表

(全8時間)

時間	学習内容・主な活動
1	■とびら ・ プレ活動 ■GET Part1-① ・ 新出表現(can)の導入, 練習
2	■GET Part2-① ・ 語句・表現の導入 ・ 本文の導入・理解
3	■GET Part1-② ・ 新出表現(can の疑問文・否定文)の導入, 練習
4	■GET Part2-② ・ 新出表現を用いたコミュニケーション活動 ・ 語句・表現の導入 ・ 本文の導入・理解
5	■USE Read ・ 題材の導入 ・ 語句・表現の導入 ・ 本文の導入
6	■USE Read ・ 本文や題材についての内容理解 ・ Q&A などによる理解度確認 ・ 新出表現を用いた応用練習
7	■USE Listen ・ リスニング ・ 表現活動
8	■USE Speak ・ コミュニケーション活動

実践例

1. レッソンのねらい

「初めての USE-Read」

英語の授業の中で生徒の苦手意識の高いものの一つに、長文を読むことが挙げられる。公立高校の入試問題を見ても、内容的には比較的読みやすいものであっても、その語数はかなり多く、文章を見ただけで読むことをあきらめてしまう生徒も少なくない。

LESSON 7 では、初めて USE Read のページが加わり、生徒にとって初めて、英語でまとまった内容の文章を扱う。これからの長文読解の最初のステップとなるこの LESSON で、英語で文章を理解できることの楽しみや達成感を味わい、今後より深い内容を読みたいという動機づけになるような指導構成にしたい。

文法事項は can のみで、生徒たちもよく耳にするフレーズなので理解が早い。しかし初めての助動詞なので、ルールをきちんと教え、口頭練習を多くさせた後、自己表現活動につながるよう指導する。自己表現活動は生徒の興味関心に合った内容を精選することが大切であるが、ここでは教科書にある Practice Speak のクイズ活動が適切であろう。

また、本課では京谷選手の人生や、スポーツとしての wheelchair basketball に焦点をあてて、USE Read を読む楽しみに焦点を当てるべきであろう。文法事項の can についても本文中でどのようなニュアンスで使われているのか (wheelchair basketball のルール説明など) を理解させたい。他のスポーツについても、can を使ってルール説明をし、バラレルな題材を扱うことで、理解を深めさせたい。

また、ピクチャーカードなど Visual Aid を活用したり、Oral Introduction で必要な語彙について予め類推させたりすることで、全ての語彙を知らなくても英文は読めるということを生徒たちに教えたい。パラリンピックや、車いすを使ったスポーツを紹介することで、障害を持った人たちの活躍を身近に感じ、彼らの生き方について考えたり、自分ができることを考えたりするきっかけにしてほしい。

2. 授業での活動

とびら絵の紹介をする前に、普通の車いすと、車いすバスケットボール用の車いすの写真を見せる。

T: Look at this picture. This is a wheelchair. But these two wheelchairs are different. This is a normal wheelchair, and this one is a special one.

そして、陸上競技用の車いすの写真、その他の車いすスポーツの写真を見せる。パラリンピックでの車いすを使った陸上競技は見たことがある生徒が多いと思う。

T: Look. There are many kinds of wheelchair sports. What sports can they play in wheelchairs?

S: Track & field. / Tennis.

T: That's right. Also, they can play rugby, carling...

とびら絵を見せて生徒に尋ねる。

T: What sport is this? Do you know this sport?

S: Basketball.

T: Yes. This is wheelchair basketball. They are physically challenged with their legs. They can't walk, so they use wheelchairs every day, and they can play basketball with their wheelchairs, too.

What sports can you play, everyone? I can play tennis. Now let's learn new expressions.

と言って、can の導入に入ってもいいだろう。

このように、本レッスンの新出表現である can や keyword となる wheelchair については、日本語を使わずに導入したい。

(1) can の導入

can は前述のとおり、よく耳にするフレーズで、何となく意味が分かっている生徒が多い。最初は日本語を交えずに、Teacher Talk で多くの can に触れさせ、ニュアンスを理解させる。ここではとびら絵からの導入例を紹介する。

T: Look. He plays basketball. He can play basketball very well. Can you play basketball, S1?

S1: Yes.

T: That's great. I can't play basketball. But I can run fast. I'm good at running. Look at

this picture. Who is he? (ポルトなど有名な陸上選手の写真)

S: He is ○○.

T: Right. He is a great runner. He can run 100 meters in 9.6 seconds.

I want to be a fast runner. I need practice. But I'm busy from Monday to Friday. I can practice only on Saturday and Sunday.

導入としての Teacher Talk のポイントは、①まとまりのある内容を話すこと、②生徒の興味のある話題であること、③生徒との interaction を持つこと、である。リスニングは大筋が理解できればいいので、未習事項であってもよく使うフレーズは積極的に取り入れ、耳に慣らしておきたい。

また、目的なく聞かせても、生徒も何を意識して聞いていかわからないので、ワークシート（資料1）でリスニングポイントを与えてから聞かせる。

（2）can を使ったコミュニケーション活動

～Practice Speak のクイズを使って～

GET Part 2 の Practice に、動物についてのクイズを、can を使って表現する練習がある。これを個人からペア、グループで行い、最後はクラスでのクイズ大会を行う。

Listen の活動を個人で行った後、Speak の例をもとに、一人一題問題を作り、ペアで出題し合う。出題する側は最初に、「自分が動物、鳥、虫…である」という種類を言い、can / can't を使ったヒントを一つ言う。そうすると相手もより具体的に質問ができるので活動も盛り上がる。また、出題者への質問は3つまで、ヒントを1回だけ要求できる、などのルールがあるとおもしろい。

例) A: 出題者 B: 回答者

A: I am an animal. I can run fast.

B: Can you climb trees?

A: No, I can't.

B: What color are you?

A: I'm yellow and brown.

B: Can I have any hints?

A: OK. I am very tall.

B: Do you have a long neck?

A: Yes, I do.

B: I got it! Are you a giraffe?

A: Yes, I am!

これをペアで行った後、グループで出題し合う。グループは3～4人がよい。グループ内で出題し合った後、1～2問おもしろい問題を選ぶ。なるべく間違いがないよう、グループで問題を完成させて、クラスでグループ対抗クイズ大会を行う。終わった後に、個人でワークシート（資料2）にクイズを書かせる。

PCDA サイクルのように、一人のアイデアを周りからのフィードバックやアイデアを得て、さらによいものに仕上げて完成させることがポイント。最後に個人で書かせるときは、自分のクイズをより表現豊かに書く生徒もいれば、グループで完成させたクイズを書く生徒もいる。英語が得意な生徒も苦手な生徒も、個々の課題に応じてクイズを完成させることができる。

コミュニケーション活動は、文法事項の練習が一つの目的ではあるが、生徒が文法の練習のためにやらされていると思わないような、自然な流れや必然性が大切である。活動の中で生徒が間違えても、（話す活動の中では特に）一つ一つ訂正せずにミスを許容し、相手の言いたいことを類推することを指導することが「間違うことを恐れずコミュニケーションを図ろうとする」意欲的な態度の育成につながる。活動のまとめとして、話す活動のときに多かった共通の間違いをフィードバックすることで、全体への指導ができる。また最後の書く活動ではミスをきちんとチェックし、できれば全体へのフィードバックができるとなおよい。生徒の活動を組み立てるに当たっては、Listening・Speaking 活動から、Reading・Writing 活動へ、言語習得の自然なプロセスを意識することが大切である。

（3）USE Read

Teacher Talk での導入。バスケットボールのルールと京谷選手について生徒とインタラクションを取りながら説明する。ピクチャーカードや絵を使いながら説明するとよい。

T: (京谷選手の写真を見せて) Everyone, please look. He is Mr. Kyoya Kazuyuki. He plays wheelchair basketball. But before that, he was a professional soccer player. In 1991, he became a J-Leager, a member of Jeff United

Ichihara. In 1993, he got into a car accident and stopped playing soccer. He couldn't walk any more. He started to use a wheelchair and play wheelchair basketball. He was a member of Japan National Team in the Paralympic in Sydney, Athens, Beijing and London.

(車いすバスケットボールの写真を見せて)

Look at this picture. This is wheelchair basketball. It is like original basketball in some points. Do you know any rules of basketball?

How many members in one team? (Five.) How many steps can they walk with the ball? (Two.)

In normal basketball, players can walk two steps with the ball. They have to dribble when they move. Do you know any other rules? (トラベリング, ダブルドリブル…)

OK. Let's read the textbook and see the rules of wheelchair basketball.

Teacher Talk に続けて, CD を聞きながら教科書を読ませる。In-Reading, Post-Reading の流れを元に, オリジナルのワークシート(資料3)を作成し, 使用した。

新出単語についてはすぐには教えず, 全体を通して読む中で, 前後関係から意味を類推させたい。ワークシート(資料3)には, フレーズごとに日本語⇄英語をとらえるタスクがある。フレーズで考えると, その中の知っている単語がヒントになり, 全部の単語が分からなくても答えることができる。最初に個人で取り組ませた後, ペアで教え合いながら考えさせてもよい。

教科書には Post-Reading として, 本文に関する Q&A をペアで行うタスクが載っているが, いきなりこれを行うには少しハードルが高い場合, GET Part 1 のページを使って, 1 文ずつ質問を作る練習をしておくとうい。

This is my brother, Bob.

→ Who is he? / Is this your brother Bob?

He likes sports very much.

→ What does he like? / Does he like sports very much?

…のように, 1 文に対し, 質問を作る練習をさせる。

LESSON 6 からの GET Part 1 は 1 人称語りのパターンなので, 日常の授業の中で継続して行っていくと英問英答のよい練習になる。

他にも GET Part 1 は Chat でのあいづちの練習にもできる。

This is my brother, Bob. (Oh, I know him.)

He likes sports very much. (Me, too.)

He's a member of a basketball team. (Oh, is he?)…など。

生徒のそのときの課題に応じて, 教科書それぞれのページの特徴をいかし, 内容理解や音読だけでなく練習を, 日常的に授業に取り入れていきたい。

3. まとめ

インターネットを開けば, 英語の web ページが無数にある。ネットの普及により, 現代は英語学習者にとってはとても恵まれた学習環境にあると言える。中学校, 高校での英語を終えた後, それらの情報を得られる, 読みたいと思える, そのような学習者を育てることが私たち英語教員の役割である。LESSON 7 では初めての USE Read を通して, 「読む楽しみ」「読める喜び」「もっと読みたいという意欲」を育てる。それが 2 年生, 3 年生での Reading 活動につながり, 最終的には自分で英語を読もうとする自立した学習者を育てることになるのだ。